（様式２）

# 令和２年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（　常陸大宮市立山方小学校　）

## １　学校全体としての取組

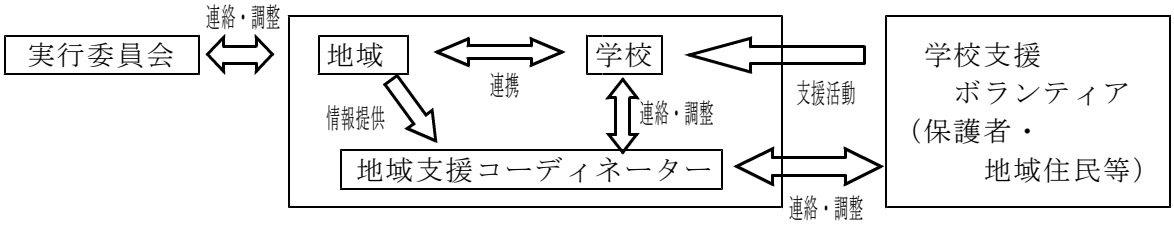
(1) 目　的

学校・家庭・地域が一体となり，協働する仕組み作りを推進し，子どもたちの学びを支援することで，地域の教育力を学校教育に生かし，児童の健全育成に努める。

(2) 内　容

①連携体制の構築

常陸大宮市では学校支援地域本部事業実行委員会があり，次の図のような組織の中で連携をとりあい活動を進めてきた。




②学校内での事業の具体的進め方

学校で地域人材を必要とする事業を計画する時には，教頭が学校支援地域本部事業実行委員会で作成されているボランティア名簿を活用し校内行事担当者と地域支援コーディネーターと相談しながら，人材の選定を進めた。支援者を決定後は，学校・地域支援コーディネーター・学校支援ボランティアと連携をとり詳細について連絡調整を進めていく。

## ２　家庭・地域等との連携の工夫点

令和２年度は，感染症拡大のため，支援ボランティアの方の中にも本年度に限って，活動することが心配になり，支援を見送る方もいた。学校としても，「新しい生活様式」に従い，今までとはちがった学校行事の在り方を検討した。そこで事業の見直しや縮小を余儀なくされ，読み聞かせボランティアと毛筆指導の計画は実施することができなかった。そのような中であったが，できる限り家庭・地域と連携を図り，形を変えて事業を進めてきた。

(1) 草取りボランティアとの協働作業

４月から１０月の期間で，毎週１回１～２時間程度地域のボランティアの方々が校庭の草取りを行ってくださった。ボランティアの方々の取りまとめや活動の段取りなどはすべて地域支援コーディネーターの方が行ってくださり，学校としては手間をかけることなく活動でき，たいへん助かった。

その活動にあわせて，学校でも児童の愛校作業を実施してきた。地域の方々と一緒に協働作業を行いふれあいをもつことで，奉仕の心の育成だけではなく，普段接することができない方と心を通わすことができ，新たなつながりを構築することができた。

ボランティアの方々からも好評で，校外で児童と出会ったときにお互いに声をかける機会が増え，地域の挨拶拡大にもつながった。

(2) 故郷再発見の活動

① ふれあいまつり

例年であれば，全学年及び保護者参加により縦割り班を編制し６～７の講座に分かれ体験活動を実施した。体験活動後，第２部として地域の方々や保護者へ感謝を表す集会を行っていた。しかし，令和２年度は感染症拡大防止のため，行事内容の見直しを行い，第２部は中止とし，体験活動のみとした。その体験活動も６年生のみを対象として２講座（そば打ち体験・切り絵体験）での開設とした。

講師の先生については，地域支援コーディネーターに相談をし，適切な方を紹介していただけた。そのため，快く引き受けてくださり，当日の活動についても，学校と連絡を密に取り，スムーズに進めることができた。

② スナッグゴルフ体験教室

常陸大宮市は数多くのゴルフ場があり，ゴルフに興味をもつ児童が多い。特にスナッグゴルフでは，昨年度市内から全国大会に２校出場し，優秀な成績を修めている。本校もその１校である。

４・５年生を対象に，地域との連携も目的の一つとして，体験教室を実施した。初めてクラブにふれる児童も，基礎からていねいに教えてくださったことで，楽しく体験をすることができた。

③ 御城太鼓体験教室

地域の御城太鼓を継承している会の協力をいただき，御城太鼓の体験活動を実施することができた。

児童は，普段ふれることのない太鼓を実際にたたくことができ，最後はみんなで簡単な曲を演奏することができた。

また，自分の体よりも大きな太鼓をたたかせていただき，児童はその重厚な音に驚きながら，貴重な体験をすることができた。会の方も，これを機会に地域に少しでも目を向けてくれるようになることに期待をしていた。

## ３　事業の成果と課題

【成果】

○　保護者アンケートでは，郷育（つながりを大切にし，故郷を愛し，慈しむ）を積極的に実践していると感じている割合が，87 ％であった。また，保護者や地域に情報を積極的に伝えていると感じている割合が 90 ％であった。このことから，地域とのつながりを肯定的に捉えている保護者が多いことがうかがわれる。

○　行事を通して地域の方々とのつながりが深まっただけではなく，学校外でも児童と地域の方の挨拶が交わされる機会が多くなった。

【課題】

○　今後，コロナの拡大状況により，「新しい生活様式」をふまえた効果的な行事の内容を，学校だけでなく，地域の方も交えて検討していく必要があると感じた。

（様式２）

# 令和２年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（常陸太田市立西小沢小学校）

## １　学校全体としての取組

「子供たちの未来につながる地域とともにある学校づくり～地域団体及びおやじの会との連携による教育活動の充実を通して～」のテーマのもと，地域団体やおやじの会と連携し，「ひと・もの・こと」と「つながる」ことを大切にした教育活動を継続的に実践してきた。しかし，今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため，地域団体やおやじの会と連携した事業等を計画通りに実施することは難しく，計画を変更せざるを得ない場面が多くあった。直接会って交流することは困難であっても，「今できること」を考え，児童主体の集会活動や交流活動等に工夫して取り組んだ。

## ２　家庭・地域等との連携の工夫点

### (1) 西小沢ふれあい集会

例年，地域の老人会に講師を依頼し，親子による体験活動を実施してきた。今年度は，老人会との連携が困難であったため，６年生が企画運営を行い，親子の体験活動を取り入れた集会活動を行った。

**＜連携の工夫点＞**　（コロナ禍のため，未実施の内容を含む）

・公民館活動との連携【既存の活動との連携】
・地域人材を活用した体験活動（親子活動）【地域人材の活躍の場】
・６年生が主体となって活躍する場の設定【児童の活躍の場】
・活動の様子の周知・広報（学校だよりやＨＰ等の活用）【活動の見える化】
・中学校（吹奏楽部）との連携【小中連携，先輩の姿から学ぶ場】
・地域ボランティアの方との交流【感謝を伝える場】

［活動の様子］

６年生が講師となり，５つのブースに分かれ，親子活動を行った。これまでの教わる立場から教える立場へ変わった６年生は，事前準備を重ね，主体的に活動することができた。６年生の保護者は，リーダーとして活躍する姿に子供の成長を感じることができた。また，１～５年生の児童は目指すべき姿として，６年生が活動する姿を見ることができた。

［感謝の気持ちを込めて］

地域ボランティアの方との交流が困難であったため，お礼の手紙を冊子にしたものと集会活動の中で作成したお礼の言葉が書かれた缶バッチをお贈りした。

学校だより等でも紹介し，子供たちの思いや活動の様子が，直接，交流することが難しい地域の方々にも届くよう心がけた。缶バッチを付けて，子供たちの交通指導に当たってくださる方もいて，「つながる」を実感する活動となった。

**(2) 地域の福祉施設や高齢者との交流**

地域の障害者福祉施設と連携し，運動会(招待種目)やクリスマス会(５年)を行っている。今年度は，直接会って交流することが難しいため，クリスマスカードを作成し，お贈りした。障害者福祉施設の利用者の方からいただいたメッセージには，毎年，実施している劇や合奏を楽しみにしていることやまた一緒に活動できるようになることを願う言葉などが書かれていた。思いと思いが「つながる」ことを実感できる活動を積み重ねていきたい。また，社会福祉協議会と連携し中学校区に住む一人暮らしの高齢者の方に手紙を届ける活動を実施した。

［クリスマスカードとメッセージボード］

＜連携の工夫点＞

・地域施設，地域関係団体との連携【顔の分かる活動の継続】

・「できることをできるときに」　【ゆるやかな連携】

**(3) おやじの会との連携**

おやじの会主催の夏祭り・かき氷・避難所体験・芋煮会・餅つき・凧揚げ大会等の行事を予定していたが新型コロナウイルス感染症対策のため，実施できなかった。そこで，防災に関する情報をまとめた文書を作成し配布した。おやじの会が主体となり，地域のためを考えて活動する大人の姿から，自分たちの未来像を描く参考となるよう学校と地域が連携した。

■非常持ち出し袋をチェックしよう

［防災知識をまとめた文書の一部］

**＜連携の工夫点＞**

・学校とおやじの会との情報共有【ビジョンの共有】

・おやじの会の活動とＰＴＡ活動の連携【活動への理解と予算の確保(保険含む)】

・活動内容の周知・広報【地域への活動内容の周知及び協働体制の確立】

## ３　事業の成果と課題

**【成果】**

○　教育活動の意義を重視し，工夫・改善を行うことで，学校・家庭・地域との連連携の在り方を見直すことにつながった。

○　地域のために活躍する人の存在を身近に感じることができる体験は，子供たちが自分の生き方を考えるよい機会となった。

■学校評価による検証

「地域の方などと一緒に行う授業や行事は楽しい」　児童のプラス評価　100%

「保護者･地域の方々との積極的な連携に努めている」保護者のプラス評価 97.7%

「学校は保護者や地域から信頼されている」　教職員のプラス評価　100%

■意見聴取による検証（学校評議員・おやじの会から）

感染症対策を講じながらの事業の在り方として，プラス評価意見をいただいた。おやじの会として，地域の核となる活動を考えていきたいとの思いが深まった。

**【課題】**

○　子供たちに身に付けさせたい力の明確化と地域・保護者との共有（地域と連携する活動の持つ教育的価値の共有）

○　地域との連携を推進するための人材の確保（高齢化，ゆるやかな組織づくり）

（様式２）

# 令和２年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（　神栖市立やたべ土合小学校　）

## １　学校全体としての取組

学校・家庭・地域連携を図ることは，本校の学校教育目標である「夢に向かって　学び合う温もりのある児童の育成」を目指す上で非常に重要である。そこで，保護者や地域の方々と様々な場面で関わりをもち，協働して活動することで教育目標に迫ることをねらいとして，以下の活動に取り組んだ。

１　ＰＴＡを中心とした活動
２　波崎二中学区小中連携
３　地域や外部講師との連携

## ２　家庭・地域等との連携の工夫点

### １　ＰＴＡを中心とした活動

ＰＴＡ本部役員を中心とした組織的な活動を行い，保護者の教育活動や児童に対する理解・協力を得ることができるようにする。

(1)　イクメン会(おやじの会)の呼びかけによる学校再開前の学校内の環境整備【５月】
(2)　広報・図書委員と連携して図書室備品の整備・修繕【10月】
(3)　学年・教養委員による保護者を対象とした文化的活動（陶芸教室）の実施【11月】
(4)　校外指導委員による交通安全指導【通年】
(5)　保護者ボランティアと連携した保健指導（歯みがき指導）の実施【12月】

イクメン会の環境整備

陶芸教室

歯みがき指導

修繕前の椅子

修繕の様子

修繕後の椅子

### ２　波崎二中学区小中連携

一小一中の特性を活かした連携を意識した取組を行うことで９年間を見通した指導体制の確立を目指す。

(1)　リモート会議による中学校生活の紹介や意見交換【８月】
(2)　避難訓練・合同引き渡し訓練【11月】

リモート会議

避難訓練

引き渡し訓練

３　地域や外部講師との連携

普段の学校生活では体験することのできない活動を通して，地域社会の一員としての意識を高めよりよい生活を目指そうとする態度を養う。

(1)　青少年相談員あいさつ運動【９月より毎月１回】
(2)　４年水道出前授業の実施（茨城県開発公社）【９月】
(3)　２年・５年食育指導（植松小栄養職員・本校栄養教諭）【10月】
(4)　スクールカウンセラーによる職員研修「カウンセリングについて」の実施【10月】
(5)　外部講師を招いたキャリア教育の推進【11月】
(6)　文化芸術鑑賞会（東京アカデミック管弦楽団）【12月】

水道出前授業①

水道出前授業②

食育指導

キャリア教育講演会

文化芸術鑑賞会

## ３　事業の成果と課題

【成果】

・ＰＴＡ会長を中心としたＰＴＡ組織との協力体制を推進した結果，子どもたちの生活や学習に対する関心が高まり，多くの保護者の協力を得ることができるようになった。
・各種活動を進める際に，保護者の協力を得たことで児童と関わる人数が増え，密集を防いだりより細やかな対応をしたりすることができた。
・保護者アンケート結果より，「教育目標，教育方針，教育活動が保護者に分かりやすく伝えられている。」（82%）であった。保護者との関わりを大切にした取組を通して，本校の教育目標を共有することにつながった。

【課題】

・予定していた行事の実施が難しく，外部の方々に来校してもらうことも難しかったため直接的に関わったり，参観したりする機会を十分にとることができなかったので，行事の実施方法について工夫する必要がある。
・ＰＴＡ役員との合同研修を開催し，ＺｏｏｍやＭｅｅｔなどを活用してリモートでの関わり方について工夫する。ただし，リモート会議は，オンタイムであるため時間調整など計画を綿密に立てる必要がある。
・保護者アンケート結果より，「子どもは，家庭において『進んであいさつをする』『きまりを守る』などの基本的な生活習慣が身に付いてきている。」（79%）であった。本校の児童が苦手とする面である「あいさつ」については，今後，家庭・地域との一層の連携を図り改善していく必要がある。

（Ａ４　２枚程度）

（様式２）

# 令和２年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（　つくば市立葛城小学校　　）

## １　学校全体としての取組

本校は，ＰＴＡやおやじの会の他に，地域の団体であるおかんの会，葛友会，愛校会などがあり，家庭や地域とのつながりが非常に強い学校である。運動会や葛城まつり等の学校行事に対し地域の方がたくさん参加されており，読み聞かせ等の学校支援ボランティアも活発である。

１．授業支援（10月）
・対象：５・６年生
・筑波大学陸上競技部・陸上競技研究室
・陸上競技者としての普段の練習や心構えについての講話や速く走るための練習及び体験

２．読み聞かせ（通年）
・全学年対象
・毎月第１金曜日の朝の時間
・保護者と地域の方からなる読み聞かせ　ボランティア
・コロナ禍により朝の読み聞かせができない時は，お昼の放送による読み聞かせ

３．環境整備，リサイクル活動
・草刈ボランティア活動（７月，９月）
・花壇ボランティア（通年）
・学校・ＰＴＡ行事としての環境整備，リサイクル活動（８月）
・新型コロナウィルス感染症予防のためドライブスルー方式により回収
・メール等で参加を呼びかけ，集まった保護者や地域の方

４．運動会への協力（10月）
・おやじの会
・テント設営及び片付け
・決勝審判等の手伝い

５．トイレ掃除や消毒ボランティア（通年）
・保護者や地域の方　・できる人ができる時に行う
６．カーテンの洗濯とタッセルの取付作業（12月，１月）
・保護者や地域の方
・子どもたちが登校していない冬休みの期間
・カーテンの洗濯
・カーテンへのタッセル縫い付け作業
７．地域防災関連
・非常食作り講習会（８月）
・防災倉庫の点検（12月）　・葛城版コミュニティスクール委員

## ２　家庭・地域等との連携の工夫点

○学校だよりやＰＴＡ広報誌のメール配信，ＨＰ掲載や区会回覧の取り組み

葛城版コミュニティ・スクールが立ち上がってから３年目を迎える。昨年度は，地域防災拠点としての学校の在り方を考え，防災かまどづくりの整備を進めてきたが，今年度は，新型コロナウイルス感染症拡大により緊急事態宣言も出されたことから，集まっての取組がなかなかできなかった。

そこで，一堂に会しての話合いができないことから，それぞれの思いを共有するために，学校だよりやＰＴＡ広報誌，葛城版コミュニティ・スクールだよりのメール配信やＨＰ掲載，区会回覧等の取組を進めた。

配布文書やボランティアの募集等がある場合にも，保護者及び地域の学校支援ボランティアの方にメールでお知らせした。

## ３　事業の成果と課題

**【成果】**

○できる範囲での活動となったが，それぞれの取組が子どもたちや家庭，地域の方に「学校を拠点とした地域コミュニティの在り方」を考えるきっかけとなった。

○長年培ってきた地域からの支援を改めて感じることができた。特に，リサイクル活動では，地域からの支援が大きいことを実感できた。

○学校だより等で家庭教育の大切さを記事にすることで，保護者が家庭教育への関心を高めるとともに，学校と連携することの大切さに気付いた。

**【課題】**

●新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を取ろうとすると，計画していたことが思うように進まなかった。

●葛城版コミュニティ・スクールについても，人的・物的な偏りがないような組織や取組を今一度見直すとともに，無理なく持続可能な活動を再考していきたい。

（様式２）

# 令和２年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名　（結城市立江川北小学校）

## １　学校全体としての取組

テーマ　「潜在的な地域の教育力を生かした学校教育の在り方」
—学校・家庭・地域の連携を通して—

１　学校の実態及び課題
本校は、結城南中学校区にある児童数154名の小規模校である。
本校は歴代 PTA 会長（顧問団）や青少年育成会、自治協力員（区長）とのつながりがあり、意見交換ができている。児童は三世代同居の家庭が多く、保護者は親子学習会等の行事へ積極的に参加している。今後、学校の教育活動が豊かで質の高いものとなるよう、地域の潜在的な教育力（人財）を活用していくことが課題である。

２　学校経営の方針
学校・家庭・地域の連携を深め、地域の教育力を生かし、豊かな教育活動の展開を目指した学校教育を推進する。

３　具体的な施策
①　学校だよりや保護者宛て文書を全地区に配付（回覧）する。
②　「江川北小地域協働本部」を設立し、地域の教育力（人財）の活用を図る。
③　学校支援ボランティアを活用し、豊かな授業の展開を図る。
④　江北まつりにおける三世代交流（昔遊び）の支援体制を拡充する。
⑤　健康の森体験学習等、校外学習におけるボランティア体制の充実を図る。
⑥　地域の物的資源の活用を図る。
⑦　保護者からの見守りや地域住民によるながら見守りの体制を整備する。

## ２　家庭・地域等との連携の工夫点

江川北小地域協働本部の運用を図ることにより、家庭・地域との連携・協働体制を構築し、信頼される開かれた学校づくりを推進する。

〈工夫した点〉
１　地域に学校の教育活動への理解と支援を得るため、積極的に学校だよりや学校の取組を発信した。
２　「江川北小地域協働本部」を設立した。自治協力員（区長）と話合いの場をもち、学校の考えと取組について説明した。
３　学校支援ボランティアの募集について地域へ発信し、ボランティアのデータベース化を図り、各学年で学期に1度以上の授業で活用した。
４　江北まつりが中止となったが、協働本部の青少年育成会江川支部長の協力で、三世代交流事業として昔遊び活動の支援協力をいただいた。
５　健康の森体験学習では、ロータリークラブや健康の森管理人の協力により、森の中で自分の木を決め、１年間の季節の変化と木の成長を観察した。また、３・４年生を対象とした森の引き継ぎ式や６年生による植樹式を実施した。
６　３年生社会科の学習では、「昔の道具」があるかを地域に発信し、実物資料の提供をいただき、授業の中で活用することができた。
７　不審者や熱中症対策として、保護者や地域の協力をお願いした。特に、今年度は夏休み期間の縮減に伴い、熱中症対策の強化を図った。
８　学校評価の「保護者・地域に信頼され開かれた学校」の項目で評価し、成果と課題を検証した。

## ３　事業の成果と課題

【成果】
１　江川北小学区の全地域に学校だよりを発信した。地域の方からご意見や問い合わせをいただき、学校の教育活動に関心を示していただけるようになった。
２　江川北小地域協働本部を主軸に、学校と家庭・地域が連携を図り、「学校支援ボランティア」として、各学年に支援に入っていただいた。家庭科や社会科、体育等の各教科や三世代交流、自然体験活動支援により、豊かな教育活動が展開した。

（写真１・２・３）
３　三世代交流活動を青少年育成江川支部の皆様のご協力を得て実施した。新型コロナ感染症の感染拡大防止対策を取り、ビン釣り、リム回し、竹ぽっくり、竹馬の４種目の体験活動を行った。参加希望の保護者も加わり、正に三世代の交流となった。児童は、昔遊びに夢中になって取り組み、素晴らしい体験活動となった。（写真４）
４　健康の森体験学習では、２月に森の引き継ぎ式や植樹祭を３・４・６年生で実施した。豊かな自然の中で、ドングリの苗を植え、森を守っていく心が育った。また、地域を大切に思う気持ちが培われた。（写真５）
５　社会科「昔の道具」では、学校から地域への呼びかけにより、多くの方々から実物資料の提供をいただいた。黒電話、たらい、蓑がさや火鉢など、多くの貴重な道具が学校に集まった。子ども達は、たくさんの道具に触れ、昔の人々の生活を考えることができ、貴重な体験となった。（写真６）
６　家庭や地域の見守りとして、下校時 WBGT31℃以上で地域の見守りの協力が得られた。熱中症にかかる児童はなく、ながら見守りの成果により、交通事故もなかった。（写真７）
７　学校評価では、自己評価として、８割の教職員が地域連携が十分にできたと評価している。また、学校関係者評価では、地域人材の積極的活用」で、「十分達成」の評価を10割いただいたことにより、地域との連携が深まっていることが明らかとなった。コロナ禍ではあるが、学校に足を運んでくださる保護者や地域の方が多くなり、「地域とともにある学校」への転換を図ることができた。

【課題】
今年度は、江川北小地域協働本部の立ち上げとデータベース作りを中心に行い、運用に向けた基礎づくりの年であった。次年度から、年間指導計画の中で、学校支援ボランティアを活用して児童の授業や活動をさらに豊かなものにするために、教育課程全体を見直し、地域人財の活用と役割分担、適切な支援の在り方などを考えていかなければならない。

写真１
【６年家庭科エプロン作成（ミシン）】

写真２
【３年社会　地域の野菜づくり】

写真３
【５・６年体育　　着衣泳】

写真４
【11月10日　三世代交流学習（１・２年生 】

写真６
【社会科　昔の道具】

写真５
【２月17日　森の引き継ぎ式（３・４年生）・植樹祭（６年生）】

写真７
【８月　地域見守り】